



国際標準化に関わった27年

国際電気通信連合 電気通信標準化局 スタディーグループアドバイザー

おおた ひろし
太田 宏



1. はじめに

私は、1992年よりNTTの社員としてITUでの標準化会議に参加し、2009年よりスイス・ジュネーブにあるITU本部でITUの職員として勤務を開始し、現在に至る。本稿では、これまでの標準化活動に関わる経験やITUでの仕事などについて述べる。

2. 会合参加者としての関わり

私が初めてITUの標準化会議に参加したのは、1992年のCCITT SG XVIII (国際電信電話諮問委員会第18研究グループ、現在のITU-T SG13)の全体会合であった。参加目的は、自分たちが開発した技術を標準(勧告)に反映させること及び実用導入したい技術をできるだけ早く標準化して、独自技術ではなく標準化された技術として導入することであった。会合の現場では提案が対立し、議論が難航することもしばしばあり、解決に複数回の会合にわたる調整や交渉が必要となることも多かった。しかし、会合中は激しく対立していても、一日の会議終了後には一緒に食事等に出かけ、会合中の対立とは一転して楽しい時を過ごしたことも数知れず、私にとっては、新鮮かつ貴重な体験であった。さらに、会合中に解決できなかった問題について、ビールやワインを飲みながら話をしているうちに、解決の糸口が見つかったことが何度もあった。

このような活動を15年以上続けていたが、あくまで会合参加者であったので、主な関心は、自分の提案がどう扱われるか、勧告がどのような形にまとまり、いつ承認されるのか、次の会合はいつ、どこで開催されるのか、それまでに中間会合はあるのか、などであった。会議をサポートしているITUの電気通信標準化局(TSB)の人たちと直接関わることはあまりなく、また、彼らが何をしているのかについてもあまり知らず、彼らの存在を意識することもあまりなかった。1997年にITU-T SG13のアソシエイトラポーターになり、また、2004年の後半からはITU-T SG15のラポーターを務め、担務遂行上、会議室のアサインをお願いしたり、会合で用いる文書の発行を依頼したりと、TSBとの関わりが少し出てきた。私は、ITUのほか、IETF、IEEE802.1などの標準化会議に継続的に参加していたが、それらの会

議でも、事務局側の人たちとの関わりは限られていた。

上記のように、様々な標準化会議に参加しつつも、会合参加者の視点しかなかった私であったが、2009年1月より、ITUの職員として勤務する機会をいただいた。以来、TSBの職員としてジュネーブのITU本部で勤務している。

3. ジュネーブへの転勤

初めての海外転勤であり、わくわくする点も大いにあったが、不安な点も多かった。いずれにしても、大きな変化であった。仕事の内容が変わり、住む国が変わり、仕事や日常に使用する言語が変わり、家族にとっても生活環境が大きく変わった。ジュネーブは出張で何度も訪れた街ではあったが、やはり、そこに住むとなると、状況がだいぶ異なる。アパートを探すために住宅地を歩き回ったり、ジュネーブの役所で手続きを行ったり、いろいろと出張時には行わなかったことを経験した。

4. ITUでの仕事

私は現在、ITU-T Study Group 15 (SG15)のアドバイザー(事務局)を務めている。ITUの職員になってみると、参加者だったころとは、関心の中心や、作業内容などだいぶ異なる。ただし、会合参加者としての経験から、参加者の要求や気持ちがよく理解できるので、それをITUでの仕事に活かすようにしている。いずれの立場で働くにせよ、ここで作成される勧告は、光アクセス(PON: Passive Optical Network)、メタリックアクセス(xDSLやG.fast)、光ファイバ、波長多重、超高速光ネットワーク、電力線通信(PLC: Power Line Communication)など、現在及び将来の電気通信網を支える基幹技術であり、それに貢献できることは私の喜びである。現在、モバイル通信が大変広く普及しているが、無線区間は、携帯端末から基地局までのわずかな距離のみであり、それ以外は、有線通信網により支えられていることを考えると、SG15の勧告は、全ての通信のインフラストラクチャを支えていると言える。

私は、SG15のほか、現在、「SMART (Science Monitoring And Reliable Telecommunications) 海底ケーブルシステム」についてのITU、WMO(世界気象機関)、UNESCO IOC(ユ



ネスコ政府間海洋学委員会)による合同タスクフォースの事務局を担当している。これは、通信用の海底ケーブルシステムの中継器に海底の水温、水圧、海水の動きを検知するセンサーを組み込み、気候変動の兆候の観測や、地震による津波の早期警告を行うシステムの実現に向けた検討を行うグループである。観測専用のケーブルシステムが既に実用に供されているが、通信、海底観測兼用のケーブルとすることにより全体のコスト低減が期待できる。一方で、非常に高い信頼性が要求される海底通信ケーブルにセンサーを追加することで信頼性が損なわれるのではないかとの懸念がネットワークオペレータから示され、これが大きな課題の一つとなっている。海底ケーブルはSG15の標準化課題の一つでもあり、私は2つの異なる視点から海底ケーブルに関わっている。

そのほか、これまでに、環境と循環型経済についてのSG5、通信品質についてのSG12を担当した。SGに加え、ICTと気候変動、スマートグリッド、災害対策についてのフォーカスグループ(FG)(1年あるいは2年程度の期間限定で、標準化の前段階の検討を行うグループ)も担当した。FGの1つについては、設立時点で「担当したい」と上司に申し出たところ、その場で決定したことがあり、良い意味で驚いた。これらの業務を通じて、これまで関わってこなかった分野についての仕事を知ることができ、多くの専門家と知り合いになることができた。

5. 言語

私の担当しているSG15では、扱う内容が技術的な事項であることもあり、ほぼ全ての仕事が英語でなされている。一方、SGによっては、アフリカ、アジア等、地域ごとのグループ(Regional Group)を設定することがあるが、その場合は、英語に加え、その地域の言語が使用されること

が多い。ITUでは、様々な地域出身の職員がおり、いろいろな言語を話す人がいる。組織としての多言語への対応能力はITUの強みの一つである。

私は一時期ITU-T SG12を担当していたので、SG12のアフリカ地域グループの会合やワークショップでアフリカの数か国に出張した。それ以前はアフリカに行ったことがなかったので、アフリカに行くこと自体が新鮮な体験であった。現地に行くことはその国や地域をよく理解するために大変有効である。西アフリカの多くの国ではフランス語が公用語、東や南の諸国では英語が公用語であることが多く、どの国でのイベントにしてもアフリカ各国から参加者が来るので、文書を英仏両方で用意し、通訳を用意して参加者が英仏いずれの言語も使用できるようにする等、フランス語が要求される場面が多数あり、フランス語を学習する動機の一つとなった。そもそもジュネーブはフランス語の地域なので、英語もかなり普及しているとはいえ、ジュネーブで暮らしていると、フランス語しか通じない場面も結構ある。

6. おわりに

海外で働いていると、日本との環境の違いからいろいろと面白いことを経験したり、発見したりする。仕事を進める上でのスタイルは日本とはだいぶ違うように見えるが、必要なことの本質は、あまり変わらないと感じている。役割分担をできるだけ明確化し、先を見越して調整・段取りを行うことで、効率的に業務を遂行することは洋の東西を問わず重要である。各国の出身者がそれぞれの強みを持ち寄って業務を遂行し、チームとして力を発揮できるのは国際機関の特長の一つである。一方、各人のバックグラウンド、出身国の文化等は様々なので、必要なこと、自分が望むことは、明確に示す必要がある。これからも、国際標準化を通じて電気通信に貢献していきたい。